

---

# 続黄金の堅武斗虫 ~水面下の駆け引き~

るーずりーふ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続黄金の堅武斗虫 ～水面下の駆け引き～

### 【ZPDF】

Z0885Z

### 【作者名】

ルーザリーふ

### 【あらすじ】

黄金の堅武斗虫 ～ミクロムーン島に眠る秘宝～  
の続編です。

「おばちやーん、いるー？」

日曜の曇下がり、雨が降り始めた頃、三人の子供達が私の店にやつてきた。

見かけたことのない子たちだつたからよく覚えている。

「はいはい、あら珍しい。あの子達以外のお客なんて。」

そう言つと、三人はお互に顔を見合させ、つなづき合つた。

「ねえ、おばちやん、あの子達つて『ゴールデンビートルズ』とかいう5人組のこと？」

「そうだよ。あんたたち、友達かい？」

「うん、まあ、そんなどこかな。」

それでさ、その5人組、最近ここに入り浸つてゐるでしょ。」

「そつそつ、なんだか他の子がどんどん来なくなっちゃつて、午後になると、もう毎日毎日あの子達がぐうたらしてゐるんだよ。」

三人がまた顔を見合させ、うなづき合つ。

「あのさ、おばちやん、頼みがあるんだ。これを、あいつらに渡してくれないかな。」

そう言つて、ポケットから出てきたのは一枚の紙切れだつた。

「なんだい、これは。だれかの歌か何かかい。」

「想像におまかせ。何か適当にそれっぽい理由つけて、あいつらにこれを信じ込ませて欲しいんだ。」

「できればこれを探しに行かせられるといいんだけど。」

「こりやまた難しい注文だねえ。でも、まあやつてみるよ。いつまでも店の前でダラダラされてもこまるしね。」

「本当? じゃあ、ようじく。」

あ、そろそろ俺たちに頼まれたつていうのは内緒にしどいてね。」

「はいはい、まかせときな。」

不思議な三人のお客は手を振りながら帰つて行つた。

「あ、そういうえあの子達、なんにも買つていかなかつたねえ。」

私はほつとつぶやいた。

小さな廃屋に、三人の少年達が集まつていた。

「リーダー、やつと終わりましたね。」

「おいすすき、もうリーダーつてのはやめろ。」

それにそのしゃべり方も元に戻せ。やりにくくへじょうがないから。

「えーっ、結構おもしろかつたのに。」

「ははっ、今度からはお前が委員長になるかいぶき。早く本題に。」

「・・・・・」

「ふざけんな。今回の活動だつて、俺はリーダー役なんかやりたくないつたんだ。

なあ、すすき。やりたくないつて言つたよな。」

「なーに言つてんの。なりきつてたくせに。」

「は？ 僕は、引き受けたことはきつちりやるタイプなんだよ。

大体な、委員長としてかなたがリーダーやればよかつたんだ。何で俺だつたんだよ。」

「まあまあ、たまには氣分転換つてことで。はい、じゃあ本題に移

ろう。」

「おこ、まだ終わつてねえ！」

「うるさい！」

「はい。委員長。」

「よし、本題に入る。今回の活動の目的は、拡大しすぎた張り場争いの沈静化、

および、隣町の1チームが保持する権力の無効化だつた。

いぶき、リーダー会議の結果はどうなつた。まだ聞いてないぞ。」

「ああ、忘れてた。『ゴールデンビートルズ』は、

俺たちが自分たちの勝利を認めたから、戦利品はいらないって言ってたぜ。

拡大した張り場も全部元のチームに返すつてさ。」

— そうか、ということは成功だな。  
いや、成功以上の成果になつた。

「成为从上？」

「実は、この活動には目的がもう一つあったんだ。

それは優秀な人材のスカウト。つまり新委員さがし。」

「え、なにそれ？」

俺は前から『二川テンヒリ二川ア』の噂は聞いていた  
チームの全員がそれぞれ優れた特性を持っていることも。  
みんなバトルをしてみて氣づいたどうつ?

リーダーである竹本勇大には、最近稀に見るリーダー気質と怪力。西村智樹には、島一番の俊足と勇気。

觀見渚には端正な容姿と第六感

そして、俺が一番興味を持ったのが安川涼。

チーム内では司令塔と呼ばれているそうだが、その頭の働きといい、絶妙に言葉を操り人を動かす力といい、期待を全く裏切らなかつた。そこで、みんなに提案がある。

安川涼を新委員として「」に迎えてみたかったN

・・・・・かなた、俺は一人の友達としてお前に訊く。

本当にそんなこと、考えてんのか?

— そ う だ。 俺 は い つ だ う て 大 ま じ め だ。

「そりゃあ、思つた。思うに決まつてゐる。でも、お前はそれでいいふきだつて思つていただろう？ これじゃ人手不足だつて」

のか？

安川涼には安川涼の仲間がいる。

俺たちだつて、この三人で一つの仲間なんじゃねえのかよ。」「そうだよ。私だつてこのメンバーで今まで活動してきて楽しかつた。

いまさら新しい委員つてそんなの、そんなのないんじゃないの?「でも、じゃあこれからどうするんだ。外からの依頼まで来るようになつたんだ。

昔みたいに簡単には行かないんだから、誰かを呼ぶしかないだろ?。それ以外に方法なんか・・・・・・・・

「ふざけんなつ!!!」

自転車をとばしてたどり着いた先にあつたのは、小さな廃屋のよつだつた。

「ここだ。場所にくるいはない。」

ツルが自信を持つて言った。

「ヤス、本当に一人で大丈夫か?」

「なにされるかわかんないよ。」

「なんなら俺も一緒に・・・・・・」

「大丈夫。あんまり心配するなつて。あいつらがねらつてるのは俺なんだろ、ツル。」

「そうだ。」

「だからこれは俺の問題なんだ。ちよちよいつと話つけてくれや。あつちの頭に話したいこともあるしな。」

俺はみんなに背を向けて、向こうに見える廃屋へと足を進めた。

## 突入（前書き）

本当の最終話です。

## 突入

さび付いたドアノブに手を掛ける。

軽く押すと、小さな悲鳴をあげながらドアが開いた。

「ふざけんなっ！！！」

そして、中からも悲鳴が聞こえてきた。

誰かが殴り飛ばされた瞬間だった。

うわっ、なにこれタイミング悪っ。ケンカか？

でも、仕方ない。ここはこっちのベースに持つていかなければ。

「お取り込み中すいませ～ん。話があつてきたんですけど～。」

三人が、ぱつとこっちを向き、ぱつと目を大きく開ける。

「あの～青空決死隊の皆さんですよね～。」

そこまで言つて、にやつと笑つて見せた。

「いや、『ミクロムーン子供平和委員会』だつたけ？」

「なつ、なんで知つてんだよっ！」

一人がかみついてくるが、微笑みでかたづける。

「そう言つ君は、神富司息吹君だよね。

一昨日のバトルではリーダーをやつていたようだが、こここの委員長は誰だ？」

「・・・・・俺だ。」

さつきまで、床に倒れ込んでいた少年が立ち上がった。

その顔には青いあざができている。

「うわあ、痛そうだね～如月彼方君。大丈夫？なんかあつたの。ま、それはいいや。今日は君たちに言いたいことがあつて来た。」

「ちょっと待て、一つだけ訊きたい。どうして俺たちの正体が分かつたんだ。

それからこの場所も。」

如月彼方が一步近づいて訊ねてきた。

「ああ、きみたちねえ、『ゴールデンビートルズなめないでくれる。

そのくらいツルの情報網使つたらいちんちでわかんだよ。青空決死隊で張つたらちよつとしか掴めなかつたのに、もしやと思ってうわさに聞いてた委員会で張つてみたらあつという間にいろんな情報が入つてきたよ。」

三人が同時に渋い表情になつた。

「いいかな、じゃ、本題に入らせてもらひ。

「これは、なんだ？」

俺が取り出したのは、小さな虫がこに入つた金色のカブトムシだつた。

神富司息吹が答える。

「なんだつて、お前らが捕まえた黄金の堅武斗虫だろ？」

「まだそんなこと言つてるのか、いい加減白状しろよ。

これは、ただのカブトムシだろ？ 『親切に金のスプレーがかかつてるけどな。

この俺に見破られないとでも思つたか？ 他のヤツは騙せても、俺にはまるわかりだ。

あのバトルが君たちに仕組まれたものだつたことも含めて。」

「それについては悪かつた。謝ろひ。

しかし、このバトルでゴールデンビートルズは変われたのだろう？ それならこちらは感謝される側だと思うのだが。」

如月彼方が挑戦的な目つきでこっちを睨んだ。

しかし、アザのついた顔ではいまいち迫力に欠ける。

「礼を言つつもりはない。そんなことのためにここに来たんじゃないんでね。

もう一つ、訊きたいことがある。何でいきなり俺たちを変えようと思つたんだ。」

しばらくの沈黙。

「依頼が来たのよ。」

棘すすきが初めて口を開いた。

「依頼？」

「そう。私たち『ミクロムーン子供平和委員会』はちょっと前まで、自分たちの耳に入ってきたこの島の問題を解決してきたの。でも、それもだんだん評判が上がりてきて、今じゃいろんなところから問題解決の依頼が来るようになったわけ。

で、今回は、あなたたちにやつつけられたあるチームのリーダーから

バトルばっかり申し込んで、勝ち続けて、張り場ばっかり大きくなつたチームに困つてゐつて

ハガキが届いたの。」

如月彼方が会話を遮るように入つてきた。

「そういうことだ、安川涼。こちらからも一つ頼みがある。」

神富司息吹と棘すすきがはつとした表情になり、如月彼方を仰ぎ見る。

「実は、この委員会に

最後までは言わせなかつた。

「なあ、如月彼方。お前、気づいてた?

その顔のアザ、奇跡的な位置にヒットしてゐんだぜ。」

顔面つて、一力所だけ痛みをあんまり感じないとこころがあるんだよね。

見た目ほど、痛くないはずだよ。さあ、これはどうしてかな?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう俺の話すことはない。さ、帰ろうかな。」

後ろを向いて、ドアに向かつて歩き出す。

誰も、何も言わなかつた。

ドアが閉まる瞬間、俺は言つた。

「本当の仲間つて、なかなか見つからぬモンだぜ。」

ぱたん、と小気味のいい音がして、背後のドアが閉まつた。

廃屋を出ると、

「大丈夫か、ヤス!」

「ケガしていない？」

「なに言われたんだ。」

心配の嵐が俺を待っていた。

「おいおい、話しただけだつて。大丈夫だよ。」

タケがまだ言つてくる。

「なにを話してたんだよ。」

俺はふつと笑つた。

「協力してくれたお礼の問題解決返しつとこさ。」

安川涼の背中がドアの向こうに消えてから、如月彼方は神宮司息吹に向き直つた。

「いぶき、知つてたのか。いや、柔道二段のお前が知らないわけないよな。

だから、ここをねらつたんだろう？」

神宮司息吹がそっぽを向いて言つた。

「そんなんじやねーよ・・・・・・」

「ねえかなた、わかつたでしょ。なんだかんだ言つても結局手加減しちゃうんだよ。

これが本当の仲間なんじやないの？」

棘すすきの言葉はどこまでもやわらかい。

「ああ、そうだな。悪かつた、あんなこと言つて。俺、どうかしてたな。

ここから増えても、減つても、そんなの俺たちじやないもんな。

大変もいい。三人で頑張ればなんとかなるさ。

いぶき、かなた、これからも委員会やつてこつな。

「もちろん。」

「あつたりまえだろ。」

二人の笑顔を受け止めてから、如月彼方は「よしつ」と立ち上がつた。

「まだ、もう一仕事あるんだが。忘れてないか。」

「そう言って、一枚のハガキを取り出す。

「あつ、依頼の返事！…」

「「」名答。」

「まだ書いてなかつたのかよ。もうとっくに届いてる頃だと思つてたぜ。」

神富司息吹の文句は棘すすきの一言で片付いた。

「いいじやん、いいじやん。みんなで書こうよ。」

ミクロムーン子供平和委員会のみなさんへ  
こんにちば。ぼくはとあるチームのリーダーです。

昨日、ぼくのチームが「ゴールデンビートルズ」と「ひまわり」強  
いチームとバトルして、

こてんぱんにやられてしました。

張り場も取られました。

近所のチームも全部「ゴールデンビートルズ」に張り場を取られて  
しました。

僕たちの町では他のチームの張り場では遊べない、というルールみ  
たいなもの  
があるんです。

このままでは遊び場所を全部「ゴールデンビートルズ」に取られて  
します。

他のチームもみんな困っています。

僕たちの張り場を「ゴールデンビートルズ」から返してください。  
お願いします。

若須良也より

「ねえねえ、思つたんだけど、この依頼人の名前つて……」

依頼を読み直していた棘すすきが一人を呼んだ。  
神宮司息吹がハガキをのぞき込む。

わかすりょうや

如月彼方は、はつと息をのんだ。

・・・・・ そうか、シナリオはあつちが握つてたつてわけか。  
俺たちは、とんでもない思い上がりをしていたようだ。

若須良也さんへ

問題は無事、解決しました。『ご安心ください。  
「ゴーレーデンビートルズ』は、もう張り場を取つたりしないでしょ  
う。

あなたとあなたのチームが平和であることを祈ります。

追申 こちらの問題も、おかげさまで無事、解決しました。  
まったく、あなたにはかないません。

そちらに渡つた情報は忘れて頂いて結構です。

ご無礼をおかけしましたこと深くお詫び申し上げます。

それでは、安川涼さんによろしくお伝えください。

ミクロムーン子供平和委員会より

## 突入（後書き）

読んでくださつてありがとうございました。  
これは中一の時にテスト前頑張つたものです。  
発掘したので投稿してみました。  
うーん、まだまだですね。  
もっと頑張りたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0885n/>

---

続黄金の堅武斗虫～水面下の駆け引き～

2010年10月15日22時00分発行